

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720030

研究課題名(和文) インドにおける釈迦の一代記を描く仏伝と図像の比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of Texts describing Sakyamuni Buddha's Life Story and Iconographic Images in India

研究代表者

岡本 健資 (OKAMOTO, Kensuke)

龍谷大学・政策学部・政策学科・講師

研究者番号：10425043

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「釈迦の今生の全生涯」を時系列に沿って記述するアシュヴァゴーシャ作『ブッダチャリタ』及び同様の特徴を有する仏伝について検討し、その成立について吟味することにあつた。その方法として、『ブッダチャリタ』の成立地とされる西北インドに位置するガンダーラの仏伝図と、『ブッダチャリタ』等の文献資料を、その配列状況や構造の点から比較した。結果、両者に構造上の類似点が存在することが確認できた。それゆえ、このような「釈迦の今生の全生涯」を語る仏伝の発生に、ブッダに対する西北インドという地域特有の見方が関係している可能性を確認できた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the characteristics and formation of Asvaghosa's Buddhacarita and other similar texts that temporally describe the life story of the Buddha. To do so, we compared the arrangement of these texts as well as sculptures from Northwest India (held to be where Buddhacarita was created), and found that they have structural similarities. Therefore, there is the possibility that such biographies of Sakyamuni were influenced by views of him particular to the area.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：仏教学 美術史 インド 仏伝 Buddhacarita

1. 研究開始当初の背景

仏伝は、仏教の開祖釈迦の生涯に対する仏教徒の讃歎からまとめられていったとされ、歴史的事実の陳述よりも、宗教的意味合いが強い。また、ブッダは入滅したといっても仏教の核心を占める存在でありつづけた。仏教が、活動する時代や地域を変える際に、絶えず問いなおされてきた対象なのである。

各時代・各地域の文化的特徴をも取り込み、当該時代・当該地域におけるブッダ観を反映して、多種多様な仏伝が編纂されていった。部派の仏伝と、大乘の仏伝に著しい相違が見出されるのは、描こうとするブッダ観そのものが異なるために他ならない。

仏伝の内、釈迦の誕生から死までを描く「一代記」の構造を取るものは少ない。釈尊の誕生や成道、あるいは初転法輪の前後までを中心に描く仏伝が殆どである。

上記のような「一代記」の構造を有する仏伝の最初期の事例は、2世紀頃、西北インドのクシャーナ朝下に活躍した仏教詩人アシュヴァゴーシャの手になる『ブッダチャリタ』(Buddhacarita: ブッダの所行)である。漢訳として『仏所行讃』、『仏本行経』がある。そして、アシュヴァゴーシャとともにクシャーナ朝第4代カニシカ王の師とされる僧伽羅刹撰述『僧伽羅刹所集経』(384年訳)が挙げられる。

『ブッダチャリタ』については、梵文原本 E.H. ジョンストン (*Asvaghosa's Buddhacarita or Acts of the Buddha*. Lahore) をはじめとして膨大な文献学的研究の蓄積があるが、これらの「釈迦の今生の全生涯」を「時系列」に沿って記す仏伝が成立する背景については、吟味がなされてこなかった。

このような研究状況に鑑み、報告者は以前に『ブッダチャリタ』が「一代記」という構造を有することに着目し、この構造と、マウリヤ朝アショーカ王を主人公とする仏教説話『アショーカ・アヴァダーナ』(*Aśokāvadāna: Divyāvadāna* 第26章~第29章部分)に含まれる仏跡巡礼譚とを比較し、両資料の構造が類似し、従来指摘(A. Gawroński, *Studies about the Sanskrit Buddhist Literature*, Krakowie, 1919)とは別に、平行詩節も複数存在することを指摘した。

両者が有する特徴は当時の仏伝編纂者たちにとって一定の流れを形成していたことを推定せしめる結果となった。

そして、このような比較検討を「一代記」という構造をもつ仏伝文献全てにわたって行う必要が生じた。

このような研究背景から、本研究では「釈迦の今生の全生涯」を意識した仏伝群を検討し、その成立を明らかにすることを試みた。

2. 研究の目的

本研究は、「釈迦の今生の全生涯」を扱う仏伝をすなわち「時系列」を意識した仏伝群について、それぞれの事績内容を精査し、そ

れと美術考古資料も比較対照して、両者の関連性を検討することによって、これらの仏伝表現活動の時代性や地域性を含めた成立背景を探ることを目的とする。

『ブッダチャリタ』は、釈迦の「今生の全生涯」を「時系列」に沿って記述する数少ない仏伝の一つである。本研究では、成立地域と年代とが比較的明らかである『ブッダチャリタ』を中心に、先述したようにこれと同地域、同時代の成立とされ、また構造も類似した釈迦の一代記を示す仏伝群について、その構造の共通性という視点から文献学的検討を行う。さらにこれらが記述する仏伝の時系列について、仏伝を表現した美術考古資料と比較し、関連性を探ることによって「一代記」的仏伝表現活動の成立背景を検討する。

3. 研究の方法

本研究は、上述した「釈迦の今生の全生涯」を記す「一代記」という構造を有する仏伝の成立背景を検討するという研究目的にもとづき、具体的には次のような方法で段階的に研究を行った。

(1) 仏伝資料群の内、「釈迦の今生の全生涯」を記す仏伝『ブッダチャリタ』・『仏所行讃』・『仏本行経』・『僧伽所集経』を「一代記グループ」と定義し、さらに、『アショーカ・アヴァダーナ』のような二次的仏伝資料の内、釈迦の「一代記」を記述する資料を含めて、各文献の記述する仏伝の事績について比較を行いながら精査し、かつ対照テキストの作成を行った。

(2) これと並行して、初年度より、美術史研究者との情報交換を行いつつ、インドの仏伝図の作例収集を行った。とりわけ西北インドの「一代記グループ」の仏伝文献と関わりが深いものとして、紀元1~3世紀にかけて制作されたガンダーラ地方の仏伝浮彫との共通性・関連性を重視した。

4. 研究成果

本研究は、「釈迦の今生の全生涯」を時系列に沿って記述するという特徴を有する『ブッダチャリタ』及びこれと同様の構造をもつ仏伝について検討し、その成立について吟味することにあつた。

そして本研究では、第一に「一代記グループ」に属する文献を精査するとともに、第二に文献検討に加えて、文献の構造と美術・考古資料の示している配列状況との比較を行う点に特色がある。

具体的には、

(1) 本研究で重視した「一代記グループ」と、『アショーカ・アヴァダーナ』のような二次的仏伝資料の内、「一代記」を記述する資料を含めて、事績の配列を精査しつつ全対照テキストの作成を行った。全対照テキストについては研究期間内に作成を終えたが、デ

ータベースとして公開するには様々な制限があり現在は公開に向けて編集を進めている。この対照作業によって得られた成果をもとに下記(2)のとおり、美術資料との比較を行った。

(2)「一代記グループ」に共通する事績の配列や構造と、ガンダーラの仏伝浮彫から推測できる配列状況・構造との比較研究を行った。その成果の詳細に関しては、拙稿「仏伝文献とガンダーラ美術」『龍谷政策学論集』第3巻第1号において発表し、Website (<http://repo.lib.ryukoku.ac.jp/jspui/handle/10519/5295>) 上で公開済みである。

本研究の研究結果として、「一代記グループ」の仏伝文献と、とりわけガンダーラの仏伝図の作例に構造上の類似点が存在することが確認できたことは注目に値する。

西北インドに関係を持つ文献資料と美術資料とを比較することで、その一致点を鮮明にすることができた。それゆえ、このような「釈迦の今生の全生涯」を語る仏伝の発生には、西北インドという地域が深く関わる可能性を確認できた。

インドにおける仏伝美術を確認すると、インド内部では、釈尊の生涯を時系列に沿って伝記的に表そうとする美術資料は少なく、むしろ、ガンダーラの仏伝美術資料の内に、釈尊の生涯を時系列的に、その一代記(誕生から般涅槃まで)を描こうとするものが確認できる。

このような作例として、ガンダーラ出土の「奉献(小)塔」(votive stupa)と呼ばれる塔の基壇部に嵌め込まれた仏伝浮彫(例:松岡美術館所蔵/ペシャーワル古物商旧蔵浮彫など)を挙げることができる。奉献塔の基壇部浮彫には、時系列に沿って釈尊の誕生から涅槃に至る今生での全生涯の事績を描こうとする、すなわち、「一代記的仏伝を描こうとする志向」を見出すことができる。例えば、7石版20画面(もとは「誕生」や「成道」など、現在よりも多くの画面があった可能性もある)が現存するペシャーワル古物商旧蔵仏伝浮彫を見ると、次のような筋書に沿った事績が見出せる。

「燃燈仏授記」「託胎霊夢」「占夢」「占相」「バラモンへの布施」「通学」「習学」「弓術」「結婚式」「納妃」「納妃の歓迎」「宮廷生活」「出家の決意」「出城」「釈迦説法」「涅槃」「荼毘」「分舍利」「舎利の運搬」「塔建立」

この「ペシャーワル古物商旧蔵仏伝浮彫」の作例には、釈尊の全生涯を時系列に沿って描こうとする志向が見出せる。また、この作例を含む、ガンダーラの奉献塔基壇部における仏伝浮彫の構造については、「燃燈仏授記」

や「託胎霊夢」から始まって、「初転法輪」あたりまでの釈迦の前半生にあたる場面の後、仏説法すなわち教化の場面を一・二挿入し、すぐに「涅槃」・「荼毘」・「分舍利」・「起塔」などの涅槃関係の場面に直結することが指摘されている。

本研究での比較対照により、ガンダーラ仏伝美術において特徴的である、このような「釈尊についての一代記的仏伝を描こうとする志向」が、『ブッダチャリタ』などの「一代記グループ」の仏伝群ばかりでなく、『アショーカ・アヴァダーナ』や『根本説一切有部毘奈耶雜事』といった二次的仏伝資料にも確認できた。また、それら文献資料相互も構造的に類似していることが判明した。これらの文献資料が全て西北インドとの関係を有することは、「一代記的仏伝」と西北インドとの結びつきを一層強固なものとする証拠となる。さらに、『僧伽羅刹所集経』の構造もその他の一代記グループに類するものと見ることができ、ガンダーラ仏伝浮彫と志向を一にするものであることが確認できた。

以上の研究成果は仏教学のみならず、美術史学、仏教史学の分野にも貢献しうるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

岡本 健資、舎利弗の外道調伏譚に関する試論、仏教学研究、査読有、第70号、2014、pp. 55-77
<http://repo.lib.ryukoku.ac.jp/jspui/handle/10519/5449>

岡本 健資、仏伝文献とガンダーラ美術、龍谷政策学論集、査読無、第3巻第1号、2013、pp. 43-53
<http://repo.lib.ryukoku.ac.jp/jspui/handle/10519/5295>

〔学会発表〕(計4件)

岡本 健資、仏教と環境、龍谷大学里山学研究センター第8回研究会、2013年12月5日、龍谷大学深草学舎紫英館2階東第2会議室

岡本 健資、運動家たちの《ブッダ伝》、REC講座「仏教の来た道、進む道 アジア仏教の多様性と可能性」、2013年11月25日、龍谷大学大宮学舎西翼2階253教室

岡本 健資、説一切有部の律文献と説話伝承、2012年度龍谷大学仏教学特別講座「俱舎～絶ゆることなき法の流れ～」、2012年12月6日、龍谷大学大宮学舎東

覺3階304教室

岡本 健資、仏伝文献とガンダーラ、シンポジウム「美術と文献から見るガンダーラの美術」、2012年7月15日、龍谷大学大宮学舎清和館3階ホール

〔図書〕(計2件)

仏教史学会編、法蔵館、仏教史研究ハンドブック、2014、400(内、岡本 健資担当分「仏伝文学・仏教説話」)

パーリ学仏教文化学会編、めこん、上座仏教事典、2014、600(内、岩田 朋子・岡本 健資・龍口 明生担当分「出家者の生活規範」)

〔産業財産権〕なし

〔その他〕なし
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

岡本 健資 (OKAMOTO, Kensuke)

龍谷大学・政策学部・講師

研究者番号：10425043

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：